

NPO法人 海に学ぶ体験活動協議会 第7回全国フォーラム

～海と生きる～

期日 平成25年2月2日(土) 13:30～17:30

会場 東京海洋大学品川キャンパス

楽水会館1階大会議室(鈴木善幸記念ホール)

活動事例報告

司会 続きまして、活動事例報告に移りたいと思います。

3名おられますけれども、お一方ずつご報告をいただきまして、質疑応答の時間をとり、その後、次の方へ移るといった進行とさせていただきます。

「きれいな海を守る心をひろげるためのプロジェクト」

鈴木 吉春 氏(環境ボランティアサークル亀の子隊)

司会 では、1例目は 環境ボランティアサークル亀の子隊の鈴木吉春様です。鈴木様からは「きれいな海を守る心をひろげるためのプロジェクト」というタイトルでご報告をいただきます。

それでは、鈴木様、よろしくお願いいたします。

鈴木 失礼します。楽しい講演の後で非常にやりにくいんですが(笑)、余り笑いのあるようなものではありませんので、よろしくお願ひします。環境ボランティアサークル亀の子隊の鈴木といいます。よろしくお願ひします。

「きれいな海を守る心を育て、きれいな海を守りたいという心をひろげる環境プログラム」ということで、お話をさせていただきます。

亀の子隊は、愛知県渥美半島で活動をしています。ごらんのように、三河湾、伊勢湾、太平洋に囲まれた場所です。半島の先端には「名も知らぬ 遠き島より流れ寄る 椰子の実一つ」と歌われる島崎藤村の「椰子の実」の歌や、「鷹ひとつ 見つけてうれし いらご崎」という芭蕉の歌で有名な伊良湖岬があり、1年を通してたくさんの観光客が訪れます。目の前には三島由紀夫の小説「潮騒」の舞台となった神島、そして伊勢志摩の山々が見えます。

亀の子隊はそんな伊良湖岬を近くにある西の浜を舞台に、きれいな海を守りたいという心を広げることを目的として平成10年に、私が勤めていた小学校4年生の総合的な学習から生まれたサークルです。担任した子供たちに、「西の浜はごみだらけだよ」と言われて、浜に行ってみました。すると、本当にすごいごみの量でした。社会科の学習でごみについて勉強していた子供たちが、「西の浜はごみ箱じゃないぞ。最終処分場よりひどい」と言ってごみを拾い始めたことが、活動の始まりです。

先ほどもお話ししたように、西の浜は伊良湖岬の近くにあり、伊勢湾と三河湾に面した自然豊かな海です。しかし、この季節になると伊吹おろしという冷たい季節風が吹いてとても寒い季節ですが、春から秋にかけては投げ釣りのメッカとしても有名な浜です。そして、歴史的には古墳時代からあたり一面で塩づくりが行われていて、その古墳が今も残っています。

かつては、地元の人たちにとっては食料を得たり、燃料を得たり、地引き網をしたりする貴重な浜だったわけです。しかし、昭和34年の伊勢湾台風により大きな被害を受け、堤防などが築かれたことによって、人々は海から上がってしまいました。そして、西山地区の開拓も始まり、海への意識が低下していく中で、昭和43年に豊川用水が完成し、生活は完全に海から離れました。今、農業生産高は、田原市は全国一です。

その後、高度経済成長期時代を迎え、海辺の環境は悪化していきます。あわせて浜がゴミで埋まるわけです。

平成10年から、「西の浜はゴミ箱じゃない！」をテーマに行っているクリーンアップ活動は、単なるゴミ拾いのボランティア活動ではなく、海の環境を守るための大切な活動であると考えています。また、子供たちに海のよりよい環境を守っていくことの大切さや海のよさを感じてもらうために、体験的環境学習として「海の環境を学ぶ会」を行っています。それはよりよい環境を守るために行動する子供を育てる活動でもあると考えています。そして、きれいな海を守りたいという思いを広げるために、広報活動にも力を入れています。年に1回の手紙作戦や、いろいろな地域での活動発表、パネル展示も機会あるごとに行い、思いを伝えることで、多くの人たちやさまざまな団体、行政と協働し、きれいな海を守る心を育て、思いを広げることで、よりよい海の環境づくりに貢献できるのではないかと考えています。

「西の浜はゴミ箱じゃない！」をテーマに行っている「西の浜クリーンアップ活動」の活動場所は、10キロあると言われている西の浜のほぼ中央の海を中心にして2～3キロの範囲です。10キロを一度には活動できませんので、なかなか大変なんです。この地図のように西の浜には、伊勢湾、三河湾から流れ出たゴミが太平洋のほうから入り込んでくる波の強さで押し戻されて西の浜に戻ってくるということを、幾つかの調査の中で教えてもらいました。数年前に伊勢湾で環境省が漂着ゴミ、漂流ゴミの調査をしたときに、木曾三川の河口部で流した調査用ペットボトルが幾つも流れ寄りました。

ゴミはいろんなところからいろんなものが流れてきます。今見えているのは、三重県からのゴミです。少しゴミの様子をごらんください。こうして三重県のゴミ、それから岐阜県のゴミが幾つか出てきます。きょう持ってきたのはほんの一部ですが。

これは11月に拾ったものです。これは垂井町という岐阜県の関ヶ原の東のまちのものです。大垣です。土岐市です。土岐川は天白川を通過して、名古屋を通過して、伊勢湾に流れてきます。

もちろん愛知県のごみもあります。愛知県のいろんな地域から出てきますが、多くは愛知県の場合は三河湾から流れてくるものが非常に多くあるように思います。

直接的に捨てられるものというよりも、大雨だとか、洪水だとか、台風などで流れ出たものが多いのかなと思いますが、それぞれ工業系のごみがあったり、もちろん漁業系のごみもあります。

時にはこんな大きなものもあります。これは中部国際空港工事の期間中に拾ったものです。こういった部品などは特に多くあります。

漁網も、これはまだ小さなものですが、もっと大きくて大変な手間取るものもあります。それから、船の破片だとか、これは船の一部だったんですが、砂が入っていてとても大変でした。

ブイもあります。

きょう写真で見ていただいているのはほんの一部ですが、最近では少し家庭ごみが多くなってきて

いるように思います。

もちろん不法投棄のようなものもあります。子供たちが主体の活動ですので、不法投棄という言葉はふだんは使っていません。そういう言葉を使うと、「じゃあ、取り締まってもらえばいいじゃないか」ということになってしまいそうなので、子供たち自身が、参加者自身が、海を守る心を持ってほしいということで、行政のほうに頼ることなく活動そのものはしています。

テレビなども年に2～3台。冷蔵庫、洗濯機、見ていただいたようなものが映されています。

これは何かよくわかりませんが、拾い上げることができずに、先ほどのものは行政にとってもらいました。

基本的にこうした家庭ごみは本当に多くなってきています。誰かがどこかでほいと捨てるものではないと思いますが、現実論としてこういうものがあるということです。

しかし、こうしたごみだけではなくて、実はスナメリの死体もこうして打ち上げられます。三河湾や伊勢湾で3,000頭とか5,000頭が生息していると言われているスナメリですが、活動場所だけでも年に1～2度は打ち上げられています。

亀の子隊も活動開始から15年がたちます。毎年1,000人以上の参加者を目標として呼びかけをしていて、昨年度は1,400人を超えました。ごみの量も3,000を超えるわけですが、今ごらんいただいているように、ごみの量は余り減っていません。本年度、まだ途中ですが、既に3,400というごみの量になっています。

「西の浜クリーンアップ活動」の目的は、西の浜をきれいにすることではなくて、西の浜をきれいにする活動を通して、海をきれいにしようとする心を広げること、そして海を原点として自然を愛する心を広げることです。それは子供たちの環境に対するよりよい意識を育てるとともに、人が健康に生きていくためには自然環境を大切にしなければならないことを心から理解する子供たちを育てることを狙いにしています。これは活動を始めたころの総合的な学習を進めるときに持った教師としての願いです。

亀の子隊の活動を通して考えることはいろいろあります。今ESD、持続可能な発展のための教育というものが叫ばれています。この「西の浜クリーンアップ活動」も単なるごみ拾い活動ではなく、地域を愛する心を育て、よりよい自然環境をつくり出すために活動することができる力を育てる活動であると考えています。夏の暑い日も、北風が吹く冬の寒い日も、黙々と文句を言わずに淡々と浜のごみ拾いをします。何も褒美はありません。

きれいな海を守る心を広げ、よりよい海の環境を守っていくためには、将来を生きる子供たちが参画できる、そんな仕組みづくりが必要だと思います。その中で子供たちが感じ、考え、行動していくことを支援していくことが必要だと思っています。子供たちの力は実に素晴らしいものがあります。子供たちの心は常によさを求めています。そして、それを吸収していく力があると思います。子供たちが純粋な心を持っているうちに、自然の美しさ、すばらしさに気づかせることも大切だと思います。

そこにはやはり体験が必要です。クリーンアップ活動もそうですが、年に数回行っている海の環境を学ぶ会もそうした考えのもとで行っています。座学ではなくて体験を通して海の大切さやよさを学んでいます。三河湾での佐久島周辺でのスナメリ観察会を初め、渥美半島では少なくなった磯で生き物を見つけて観察する磯遊びの会、シュノーケリングは西の浜の海で親子で安全に行っています。ま

た、生きた魚にさわって料理して食べるタッチングプールや、海水を煮詰めてつくる塩づくりの会、ふだんは見ることでできない魚や生き物たちに会いに行く水族館見学会もやっています。

西の浜ビーチコーミングでは、宝贝や桜貝などを見つけることもできる。そして、時には造形教室も行います。ランプシェードをつくったり、写真立てをつくったりということをしています。これはランプシェードをつくったときの映像です。

しかし、よりよい海の環境を守っていくためには、またつくり出していくためには、子供たちの力だけではできません。そこで、亀の子隊では、きれいな海を守る心を広げるために年に1回の手紙作戦を行い、100軒ほどの事業所に「海をきれいにする活動に協力してください」と子供たちの手紙を送ります。100軒送っても1〜2軒しか返事はありませんが、諦めずに送っていきたいと思っています。

また、名古屋環境展や伊勢湾再生フォーラムなど、いろんなところに出かけて行ってパネル展示をしたり、活動報告をしたりしています。昨年3月には三重県が主催した伊勢湾の漂流ごみを考える会にも参加しました。伊勢湾流域の人たちに知っていただくことで、下流部の渥美半島がごみだらけになっていることを意識してもらうことができ、非常によかったなと思っています。

「西の浜クリーンアップ活動」は、この1月20日の活動で191回となりました。これからも参加者1,000人を目標にして、「西の浜はゴミ箱じゃない!」をテーマにした「西の浜クリーンアップ活動」を基軸にして広報活動を広げ、思いを広げる、伝える活動を続けていきたいと思っています。また、海の生き物に関心を持って海のすばらしさ、海の大切さを感じることができるよう、「海の環境を学ぶ会」も続けていきたいと思っています。そして、伊勢湾流域圏のいろいろな人たちと連携をとりながら、きれいな海を守りたいという亀の子隊の思いを広げていきたいと思っています。

お手元にも配らせていただきましたメッセージですが、このメッセージは活動を始めたときの小学校で亀の子隊が誕生したときから、学芸会のときとか、愛知県で開かれた愛知万博の会場とか、また全国ボランティアフェスティバルの開かれたときなどにも紹介して訴えてきたものです。このメッセージにもあるように、未来に生きる子供たちのために私たちはもっともっと海を大切にしていかなければならないと思っています。

西の浜の目の前の三河湾や伊勢湾では、海洋ごみを何とかしようという動きが活発化しています。亀の子隊の活動をより充実させ、スナメリを初め海に生きる生き物たちのためにも海をきれいにする、きれいな海を守りたいという思いを広げていきたいと思っています。

ありがとうございました。(拍手)

司会 鈴木様、ありがとうございました。

ご質問などある方はいらっしゃいますでしょうか。

大塚 ほっかいどう海の学校の大塚です。貴重なお話をありがとうございます。

3トンを超えるごみがこれだけ出たりしますし、活動の幅もかなり広いと思うんですけど、地元の行政の方の支援というのはどういふのがあるんでしょうか。

鈴木 実は活動を始めたときの小学校で、当時、合併前で渥美町でしたが、渥美町の環境課の職員に来てもらって授業をしました。それ以来、行政のほうにごみの回収をしてもらっています。記録も出ていたと思うんですが、計測もしていただいて、そこまでの報告をしていただいたり、ごみ袋の提

供をしていただいたりというようなところでの支援をしていただいています。

大塚 もう一点、教育委員会さんというのはどうですか。

鈴木 痛いところですが、自分としては、私は自分の仕事もあるものですから、生涯学習としてこういうのを取り上げてほしいということで何度か行きましたが、ボランティア活動は生涯学習の中に入らないというようなことを言われて、今のところ受け取ってもらっていません。「どうしてだ」というふうに問い詰めますが、返事はありません。このあたりでつながっていけるようになると、環境教育というものがもう少し学校の中に広がっていくのかなと思います。

実は先日、きょうの国交省さんとは関係ないんですが、環境省さんの関係でこの1月18日に環境教育のためのワークショップが田原市で開かれました。コンサルタント会社さんを通して私のところへ、「こういうことをやってもらえないか」ということで来て、環境省さんのほうも職員さんが来て、全国のごみの様子などを紹介していただきながら、こういうことを、環境教育をテーマにしてやれるようにしてほしいというようなことだったんですが、そのあたりを本当に教育委員会の関係が捉えてもらえるといいかなと思います。

渥美半島は、先ほども地図で見ていただいたように、三方を海に囲まれているわけですので、海を見ずに暮らすことがないわけですから、もう少し海に向けて環境教育ができるといいなとは思っています。

大塚 ありがとうございます。

司会 では、時間も押しておりますので、御二方目に行つてよろしいかと思います。(拍手)

「海のバリアフリーまつり」

大野木 博久 氏 (NPO法人海の達人)

司会 では、2例目といたしまして、NPO法人海の達人の大野木博久様をお願いいたします。大野木様からは「海のバリアフリーまつり」というタイトルでご報告をいただきます。なお、この1月18日に、NPO法人海の達人様は、障害者を含む子供から大人まで操船体験できるセーリング支援活動などにより、海のバリアフリー化の推進に功労したと評価されまして、国土交通省バリアフリー化推進功労者表彰を受賞されましたので、ご報告させていただきます。

それでは、大野木様、よろしく願いいたします。

大野木 それでは、三重県から参りましたNPO法人の大野木です。よろしく願いします。

先ほど亀の子隊の鈴木さんのほうから、三重県からのごみをいっぱい紹介していただいたので(笑)、ちょっとつらいなと思いながらお話しさせていただきます。

これは活動場所の紹介です。ほぼ三重県側の中央に当たりますマリーナ河芸を主に活動しております。ここの伊勢湾の出口で、先ほども紹介してもらいましたけれども、伊勢湾の出口の小さな島、神島で私は生まれ育ちました。先ほど紹介のあった「潮騒」の島です。それで、活動しております。

これが海面です。このマリーナ河芸の位置、ここと、それと伊勢湾側、この2カ所で活動しております。

これが、今年の「第7回海のバリアフリーまつり」のパンフレットでございます。

裏面にメニューが記載されております。

実は変な伊勢弁で紹介するよりも、動画のほうがわかっていただけるかなと思って、動画を3分に短くしたものを用意しましたので、ごらんください。

(動画上映開始)

これはアクセスディンギーといいまして、ほとんどこけないというヨットです。

これはとっつきがいいので、先生から子供まで、結構利用される方が多いですね。

これはクルーザーということもありまして、船や波に若干抵抗のある子供や障害者の方に安心して乗っていただけるものです。

これはハウスボートですけれども、これはほとんど甲板と棧橋が同じ高さということで、車椅子のまま乗船していただけますし、屋根もついていますので、日差しを遮れるようになってる。

これは「海の運動会」と銘打ってやっているんですけれども、玉入れとか、パン食い競走とか、陸(おか)と同じようなルールでやっています。ただ、カヌーを利用するというので、子供たちには若干刺激になる。

障害者と健常者がともに活動している団体です。

出店コーナーは、授産施設やデイサービスなどでつくった製作物を展示販売する機会がないということで、場所を提供しています。

(動画上映終了)

以上が動画です。大体のイメージはわかっていただけたかなと思います。

まずこのイベントについて聞かれるのが、「海のバリアフリーまつり」をやったきっかけはということをよく聞かれます。皆さんと同じで、地域住民と特に子供たちがやっぱり海へ来ない。もっと海のことを知ってほしいということで、海を身近に感じてもらうためにはどうしたらいいだろうかということで、悩んでおりました。三重県も本州で3番目に長い1,000キロ余りの海岸線を持っております。その三重県でもなかなかマリンレジャーには抵抗があったり、いまだに一部のお金持ちの遊びとか、危ない、怖いというイメージがつきまわっております。その一方で、実は私の周りに、障害があってもヨットで楽しんだり、船舶免許をとって釣りをやったり、それなりに楽しんでいる障害者の方もいます。実はこの元気印の障害者たちをどこかで紹介したいなという気持ちも持っておりました。そういう中で日々どうしようか、海へ人を集める、海辺に人を集めるにはどうしようかという悩みも持ちながらたどり着いたのが、「海のバリアフリーまつり」です。

テーマという意味で、海というフィールドは、障害者と健常者が差がなく自由に楽しんでもらえる場所ですよ、安全なんですよというのを訴えたくて、そのテーマの中、2006年に「海のバリアフリーまつり」というタイトルのもと、初めて開催いたしました。地域の福祉団体やセイラビリティの仲間、マリナー河芸、ダイイチ、それとマリン協会の仲間たちが支えてくれまして、多くの方が来場してくれました。授産施設から地域住民までたくさんの方がイベントにも参加してくれました。結果として成功することができました。

実は終了した後に、自身も障害を持っている授産施設のある経営者の方から、「私たちがマリンスポーツを楽しめるなんて、ましてやヨットを自分で操船できるなんて、思ってもみなかった。このイベントだけはぜひ続けてほしい」ということを訴えてきました。そういうことで、毎年毎年、次回への

期待と要望の声を聞きながら、実は昨年、第7回目を迎えることができました。

「海のバリアフリーまつり」の内容は、動画を今見ていただいたので、時間もないのではしょっていきますけれども、こういう内容でしております。

これが、先ほど見ていただきましたように、アクセスディンギーです。

これがシーカヤック。

これがボート・ヨット乗船体験。

ハウスボートです。

これが海の運動会。これは実は2008年に海の日記念プロジェクトということで、国交省のほうから、子供たちが海へ集めるものを何かいろいろと提案してくれということで、当NPOとしては、子供たちが海に集まって笑い声、大きな笑い声というキーワードで「海の運動会」というのを提案しました。それが採用されて、今、体験学習も含めて、メニューの中には欠かせないものになっております。

これは「バリフリげんき舞」というのをやっています。これは障害者と健常者がともに、よさこいとか、そういうダンスということで披露しています。

これは音楽。

これは、お祭りムードを出すためにも飲食物も出店してもらいながら、授産施設の方の製作物をその場で売ってもらったりする。

これは昨年の来場者の人数です。1日目は非常に天気が悪くて、ボート・ヨットの乗船は中止したんですけれども、2日目を含めて各イベントには多くの方が参加してくれました。

これが後援、協賛、協力をいただいている企業及び団体です。みなと総研さん及びCNACさんにも後援いただいています。ありがとうございました。

これがメディアに取り上げられたものになっております。

これは昨年のまつりの様子です。

バリアフリーまつりに関しては以上ですけれども、回を追うごとに多くの方から継続開催への期待と要望が年々増してきております。県内外の複数の授産施設は、年1回のイベントに入れていただいて、団体で、バスでもって駆けつけてくれております。「海のバリアフリーまつり」というタイトルがだんだん重くなってきて、ちょっと今悩んでいるさなかではございますけれども。そうはいつても、昨年も160名を超えるボランティア及びスタッフが手伝ってくれました。たくさんの仲間や団体の協力で回数を重ねられたこと、それと参加する人たちが本当に楽しんで、また次回の開催を心待ちにしてくれていること、それを我々スタッフは肌で感じております。実は昨年初めてタイトルに「第7回」というタイトルの名前をつけまして、回数を入れました。今までは「海のバリアフリーまつり2006」とか「2007」と、いつでもやめられるようにしていたんです。(笑) 実はもうこれは、私どもも、「これはやめれんやろう」という話になりまして、もうやめられないなということで、実ははらをくくって「第7回」というタイトルをつけました。これはやり続けるかなという意思表示のつもりです。

それと、そのほかの活動についてご紹介させていただきます。

セイラビリティ活動というのは、皆さんはご存じだと思うんですが、障害者のためのセーリング支援活動としてイギリスで始まったものです。自分自身でヨットを操作することを通じて、障害者を初め、子供、高齢者の自立心、自信を生み出すことができると評価を得てきました。

実は2006年の「第1回海のバリアフリーまつり」の後、ふだんでもヨットに乗りたい、自由にマリナーナ河芸へ行きたいという要望がございまして、実はその次の年、2007年からセイラビリティ河芸を発足しました。今では4月から11月の月2回、活動しております。自分自身でヨットやカヌーに乗ることによって、彼らの自立心を養って、社会参加にわずかでも寄与できればいいかなと考えています。

今では県外からも、「同じようなイベントをしてよ」ということで、応援に行ったり、愛知県の授産施設、三重県の授産施設の体験学習——この右上に写っているのは高校生ですけれども、障害者の外洋体験学習ということを受け入れてやっております。それと、県内外でレースにまで参加するようになってきました。

これは障害者ボート免許講習です。2001年に障害者も免許が取りやすくなりました。我々は真っ先に障害者教習用の船をつくりまして、講習をしてきております。イベントに参加している障害者の方ですけれども、免許を取られて、実は年末、船まで購入したという話がありました。

これは先ほど紹介していただきました「海の運動会」です。先ほどのパン食い競争や玉入れ以外に、カヌーで綱引きをしたり、手作りのいかだでレースをしたりしております。

これはマリナーナ河芸が中心に活動している体験学習のメニューです。田中川とその干潟の……。近くにちょっと有名な、三重県で2カ所しかないという干潟がありまして、そこを中心に生き物と環境を学ぶという体験学習を、子供たち、小中学生向けに活動しております。

時間がないので、こういう活動をしております。

これは先ほどのビーチクリーンです。三重県は実は木曾三川のごみがほとんど流れてきます。だから、我々は岐阜県の子供たちにわざとビーチクリーンをさせて、岐阜県のごみが多いよということで訴えております。(笑) 西風が吹くと三河のほうにも流れますけどね。

これが活動している宿泊施設を伴った「海の学舎(まなびや)」という研修センターです。マリナーナ河芸に隣接しております。こちらのほうに、できたら一度来ていただければうれしいかなと思ってはおりますけれども、こういった宿泊施設があります。60名は宿泊できます。

最後になりますけれども、今後ということで、年々子供たちが海に親しむ機会が減ってきております。その背景には、海は怖い、危険、そういう海への認識があると考えられます。しかし、海との正しい付き合い方を学び、身につけさえすれば、むしろ冒険、発見を通して好奇心を刺激し、多くのことと出会い、経験を手に入れるかけがえのないフィールドになると確信しております。多彩なメニューと教育施設を兼ね備えているマリナーナ河芸を起点に、今後も「海のバリアフリーまつり」、セイラビリティ活動などの事業を継続するためのフィールドを環境整備していきたい。健やかな心身を育む場所として、海で触れ合い、楽しみ、海で心豊かな時間を過ごしていただけるように取り組んでまいりたいと思います。皆様も参加していただければ幸いです。

ご清聴、ありがとうございました。(拍手)

司会 大野木様、ありがとうございました。

ご質問のある方はいらっしゃいますでしょうか。

では、何かありましたら、この後の交流会で大野木様に直接聞いていただければと思います。

「美しい海づくりプロジェクト—市民協働による環境と安全・学びのまちづくり—」

大塚 英治 氏（ほっかいどう海の学校）

司会 それでは、3人目といたしまして、ほっかいどう海の学校の大塚英治様をお願いいたします。大塚様からは「美しい海づくりプロジェクト—市民協働による環境と安全・学びのまちづくり—」というタイトルでご報告をいただきます。

大塚 皆さん、こんにちは。

一同 こんにちは。

大塚 北海道から参りました大塚でございます。よろしく申し上げます。

よく「北海道は海に入れるんですか」と言われますけれども、実は沖縄の次に開設期間が長い海水浴場が小樽にはございます。6月の最終土曜日から8月の末日まで2カ月超やっております。そういったところが実はあるということで、北海道の海を含めてご紹介させていただきたいと思います。

まずきょうは環境というキーワードでお話するんですけれども、磯焼けという言葉を知っている方、手を挙げてください。75%ぐらいですね。これだけ海好きの人が集まっているにもかかわらず、2割ぐらいの方は知らないという方がいるということは、一般的にはほとんど知らないという問題が恐らくあるのかなと思います。海の中の環境というのは非常に目にしづらい。大体海にも行かないし、海の中をのぞくこともないし、メディアに取り上げられるのは森とまちとか、そういったものが多いので、なかなか一般化しづらいというところがあるかと思います。今回は海のまち、積丹というところでやっている取り組みをご紹介させていただきたいと思います。

まず積丹町ですけれども、札幌から車で2時間ぐらいの、2,500人の、高齢化が進んだ、一般的な、疲弊が進みそうな漁村です。海岸国定公園というところに指定されておまして、見たとおり断崖絶壁の海岸地形と、対馬暖流が流れ込んでいますので、非常に透明度が高くて美しい海が観光資源ということで、年間、大体100万人ぐらい——80万人ぐらいだったかもしれないんですけれども、それぐらいの観光客がいらっしゃいます。札幌から近いということで、ダイビングのポイントとして非常によく使われております。私も仕事はダイビングショップもやっております、ダイビングのインストラクターですけれども、学生のころから20年間ぐらい長く親しんでいる海で、非常に美しい場所です。

地域の課題をここでご紹介したいと思います。これは全国どこでもかもしれないんですけれども、魚が高く売れませんので、魚価低迷をして、魚がとれない。資源が枯渇していく。

さらに、先ほど申しました磯焼けが進んでいます。海藻が生えなくなりますので、写真にあるように、岩場にウニだけしか残らないという環境になってしまいます。ウニというのは、海藻を食べることでおいしい身をつけるわけですけれども、昆布がなくなりますので、えさがなくなる。そうすると、身が入らなくて、水産価値はどんどん失われていくということです。ウニだけの出荷額で積丹町は年間の水揚げ金額30%ぐらいを占めているということで、これが問題になると漁業者の所得に直接影響するという経済の構造もある。

あとは、絶滅危惧種であるトドもたくさんいて、網にかかった魚をばくばく食ってしまうといった問題もあります。トドというのはすぐにとれない。目の前で食われていても何もできない漁師さんの歯がゆさというのもあります。

あとは、こちらの写真にありますように、これは東京海洋大学さんが2年ほど前に実習で来ていただいたんですけれども、後ろにある看板に「STOP!密漁」とありますけれども、北海道に行くと山の中でもこの看板を目にすることがあったりします。それほど組織的密漁が暴力団関係者の資金源になっているということで、これは非常に問題です。1回の密漁で数千万円持っていくというのが実際にあって、多分本州の被害金額よりも北海道の場合は物すごく多い。

それと、高齢化と担い手不足ということで、漁村は疲弊しています。

これは磯焼けの状況ですけれども、見たとおり、ウニがいっぱい。ただ、海底がきらきらして白くなりますので、ぱっと見、観光資源としては美しい。皆さんに配っています、パンフレットじゃなくて、「チビスロウ」というのがありますね。表紙が非常にきれいに見えますけれども、これは海の中が白くて透明度がある海ですから、非常にきれいに見えるんですけれども、実は海の中は砂漠化している。わずかに波打ち際に残っている海藻も、こういうふうにはばくばく食べられてなくなってしまうということがあります。

ここで、もう5~6年前ですか、ダイバーと漁師さんが仲よくできないかという話が地元で起こりました。今までお話ししたように、密漁の問題があります。あとは、遊びに来た人は、漁師から見ると、ごみしか置いていかない。港に勝手に駐車して邪魔だ。ダイビングは自分たちの海の漁場をちょろちょろして邪魔だ。もしかしたらポケットにアワビの一つも入っているんじゃないか、みたいなことを皆さんは思っているわけです。地元にあるダイビングショップに若い漁業者さんも来ていて、お酒を飲みながら「ちょっと何か手伝ってくれることはねえかな」という話をしていたわけです。そういったことがバックボーンにありまして、「じゃあ、一緒に何か環境にいいことをやってみたらいいね」ということで、平成20年に協議会をつくって、これだけ観光客が海に来ているし、ダイバーの方も来ている。ただ、今までは顔も知らない、わからないからトラブルもたくさん起こっている。そういったものをもうちょっと前向きに考えてみましょうということを、地元の漁協さんを含めて協議会を設置しました。

まず最初に何をやったかということ、環境問題というのは、皆さんが非常にアプローチしやすい。みんなが価値観の共有ができるものですから、みんなで磯焼けを何とか直してみようということで、活動を始めました。ここにあるようにみんなで海に出て、ウニをとって戻ってくるという非常に単純な仕組みですけれども、この仕組みをつくるのに1年半ぐらい実はかかっています。

まず1つ目。特採名簿・健康チェックです。ここに来るのに1年かかりました。これは特別な話なので、知らない方も多いと思うんですけれども、スキューバタンクをつけて海の中で水産物をとるというのは、漁業行為になるわけです。タンク、潜水機材というのは漁具に当たりますから、それを一般の人がつけて物をとるということは、漁業法上の違反になります。これを許可してくれるのは知事の許可が要りまして、特別採捕許可申請というのをしなくてはならないんですけれども、水産庁がこういった事業を推進しているにもかかわらず、北海道庁さんに話を1年間、これをとるのにかかりまして、特別採捕許可申請を漁協さんの名前で上げて、名簿をつけて、何かあったらだめですよというようなルールや仕組みもつくって、50~60名の方にこの名簿の中で参加していただいた。これが平成20年のことです。

集まった方がその都度、健康チェックをして、「きょうは元気ですね。こういうふうに行きましょう」

と。やることは単純なので、このたもを持って、手に刺さらないようにウニをとってちょうだいと。船で出て行って、とって、出てきたものを、どこか違うところにばらまく。きょうはこういうふうにやりましたよというふうにミーティングをする。こういったことを、秋から冬にかけてやるような仕組みをつくりました。

そうすると、今まで海藻がなかったところに、このように海藻がもしやもしやと生えてくるんですね。生物多様性の基本をなしているのは海藻の森ですから、だんだん魚がふえてくるんですね。ダイバーとしては、この間まで魚がいなかった海に、何かちょっと魚がふえたんじゃないの？と。あとは、潜って海藻を見るということをダイビングして……。この中でダイビングする方はちょっと手を挙げてみていただけますか。海藻の種類は何種類、言えますか。(笑) 言えないですね。魚の種類はたくさん言えるんですけど、昆布とワカメの違いをわかる人も少ないです。というぐらい海藻というのは気にならないものなだけけれども、でも、それがなかったら魚もいないわけです。とすると、ダイバーの方も環境問題に関心が出るし、自分がちょっとやってウニをとったら、こうやって生えるということもわかる。漁師さんは海藻が生えることで、ウニも少し値段が高くて身がたくさん入るのがとれましたということで、実感してもらおう。そういうプラスの使いようがあるわけです。

ただ、これだけの作業でやると、なかなか長く続かない。飽きてしまいます。それで、地域の魅力は何ですかと積丹の人に聞くと、大体、「うちは海しかねえだろう。海で何とかしてえのよ」というように、これは皆さんが共有して思っていることです。では、海のことを資源として、いろんなことで、いろんな方が携われるような窓口をつくってみましょうということで、楽しく続けられる仕組みを考えてみました。多面的機能というのがあるんですけども、海の中では、例えば教育ができる、水産、環境、遊びなど、いろんな要素がありますので、例えば遊びのところではダイバーや観光、教育現場では社会教育、学校教育といったことがかかわるような仕組みをつくってみようということで考えました。

ここでちょっと水産庁的なお話をさせていただきますと、水産業、漁村というのは、本来、新鮮で安全な魚を、国民に海からのたんぱく供給をしましょうというのが、この本来的機能です。今までこっちを皆さんは頑張っているんですけども、きょう出てきたのは、積丹町というところは水揚げ金額が2億円とかしかなくて、北海道の中でオホーツクというのは、漁師さんの所得が2000万円ぐらいです。そこの4分の1ぐらいしかない。とすると、こっちでは産業として戦えない。もう一つあるのは、こちらの多面的機能で、こっちにフォーカスしました。これは環境保全であるとか、生命・財産の保全。これは海のモニタリングや海難の救助。あとは、交流の場所とか、地域社会の形成。こういったものを広く多面的機能として評価しましょうということで、これは国が言っていることです。

この多面的機能を外側で見ると、例えば、交流で地引き網をすとか、ビーチコーミングを試みたり、食文化の発信とか、こういったものも……。この辺は我々が今まで体験として携わってきているところですので、こういったものをこの事業の中に組み込む仕組みをつくろうということで考えました。

ただ、水産庁の保全事業というところで最初やったんですけども、水産庁さんはあくまでも水産の関係の事業しかお金を出してくれませんので、日本財団さんに相談しましたが、「それは何かいいことをやっていますね」ということで、安全・人材の育成とか、水産観光コンテンツづくりとか、教育

プログラムとか、そういったものが見えるような教材づくりといったものを資金的に援助しましょうということで、事業がスタートしました。

きょう皆さんにお配りしていますまず黄色い資料で、これを後から見ていただきたいんですけども、積丹の魅力と、ウニを通してまちのことをよく知ってみましょうという、小学校の5年生ぐらいの副読本として使えるようなデータでつくった教材をつくりました。そうすると、ここにいる漁師さんが学校に行って子供たちに、「おまえら、ウニってさわったことあるか」という話をしながら、実際に授業で使っていたりします。

積丹町の場合、1つのクラスが大体40人ぐらいですけども、その中で漁師さんの息子が5人ぐらいしかいないんですね。そうすると、水産のまちといえども、漁業が衰退してくると、多くは漁業者以外の子供たちしかいない。そうすると、そもそも海のことを知らない親に育てられて、海のことを知る機会も与えられずに育ってくるので、全然知らなかった。「この交流はよくできていますね」ということで、言っていただけたりする。

こちらは小学校の先生の教育の研修です。先ほど教育委員会さんの話も質問しましたが、学校ぐるみで何かしてくれというとなかなか難しいので、まず教員研修で来てくださいということで言いましたら、研修担当の先生が、「じゃあ、2日間ぐらいだったら行ってもいいよ」ということで来てくれました。こちらにいるのは校長先生ですけども、校長先生を初め皆さんに来ていただいて。

そういったことを徐々にやりまして、地域に、磯焼けの対策や海の大切さというのを徐々に浸透させていきたいなということで活動をしています。

そのほかにも、川の見学やB&Gのプールなどがありますので、そういったところでPRをしたり。これは東京で、地域に戻りたい、IターンとUターンのセミナーもやったんですけども、そういった人たちがこういった地域ぐるみの活動はどういうことをしているんですかということで、研修で来ていただいたりということをやっています。

そうこうすると、いろんな学校が来てくれそうになりまして、ただ、学校の研修というのはお金がありませんので、受け入れるための施設が要りますねということで、5年ほど前から休止していた研修センターを、「ちょっと貸してくれ」と。「ちょっと貸して」というのがポイントですが、「ちょっと貸して」と言ったら、「2～3日使っていていいよ」というので、最初の年はカビ臭い中で無理やり50人ぐらい泊めてみました。そうすると、まちの人が、「何かあいつらバスで来てやってるぞ。あれは休止施設なのに何で人がいるんだ」というのが議会で問題になりまして、次に議会で、「じゃあ、休止措置をやめましょう」ということで条例改正をしていただけまして、中身は特にお金はかけていないんですが、制度的に使えるというようにやっとしてもらって、ここ2年間で、こちらにあるような学校さんから1,000人を超すような受け入れをしています。泊まる場所があって、ご飯を食べてお話しできるという場所をつくってみました。

やっぱりこういうものがあると団体で学校が来やすくなるというのが環境としてあります。特に積丹のほかの宿泊施設というのは、冬の間のビジネスが、観光客がほとんど来ないので、夏で稼ごうとするんですね。そうすると、1泊1万5000円からとか、当然大学なんか来られるわけもないので、そもそも来る機会をそれでシャットアウトしている。こういった施設があることで、こういうニーズを吸収することができたかなと思います。

次に観光的なアプローチとして、ウニをみんなで割って食べてもらおうという水産観光もやってみました。こちらにいるのは、この協議会の代表の神さんという漁師さんですけれども、神さんが「とげが生えているウニはこうやって割るんだぞ」なんていう話をしながら、実際に割ってもらいます。そうすると、お客様は、「漁師さんはこんな苦労しているのがわかったわ。手間がかかるんだったらウニは高くてもしゃあないわね」なんていう話をしながら、おいしくいただけるという仕組みです。

体験としてのおもしろさと、もう一つは、ウニを1個200円で買いたまおうということで、浅海部会、ウニをとっている漁師さんの部会から1つ200円で買いました。この200円というのも結構ポイントでして、普通、ウニは折に入っていますね。あれは大体10個ぐらい入って売っています。積丹の浜辺で1,000円ぐらいで1つ買えます。それが東京へ行くと3,000円ぐらいに多分なりますので、ぜひ1,000円少々ものものを食べに来ていただきたいんですけれども、10個で1,000円とすると、ウニの値段は1個100円です。それも船の燃料代と手間賃と箱代とか全部入れて、1個100円しかならないわけなので、恐らくウニの裸の値段とすると50円ぐらいなわけなんですけれども、50円よりも、ただいいものを持ってきてこういうサービスをつけることで、200円で買うことができますという話をして買わせてもらっています。

それと、これに必要な出荷調整というのがありますので、そういったところもお願いして、この200円のウニが流通することで、お客様には海の環境も、磯焼けも含めてご理解いただいて、漁師さんにもお金が回る仕組みになっているということに気づいてもらいたいなということでやっております。

ちなみに、あとはツアーの代金の中から10%、500円ほどを環境保全の基金に回しますよということで、お金の工夫もしていく仕組みをつくりました。

こういうふうにとやると、環境保全の事業を真ん中にしまして、教育的な部分では大学やNPOや都市の方が来ていただいて、観光のコンテンツとすると、観光客の方に喜んでいただく。教材として見えるようなものをつくることで、一般の消費者の方にも、例えばこれを読むと水産のことがよくわかるとか、地域のことがわかるといったものもできてきました。

もう一つややこしいのは、先ほど行政の質問もしましたが、ここに役場の中でも商工観光課と農林水産課と教育委員会と、まちの中では観光協会、商工会といったいろんな方々がありますし、ここでやっていることはこっちは知らないというのがありますので、一遍にとやると、「あいつらは何をやっているんだ」という話になりまして、それがややしばらくあったんですけれども、最近、大分解決してきました、プロジェクトに対するご理解が進んでいる。

ということで、これは去年の11月ですけれども、「第32回全国豊かな海づくり大会～美ら海沖縄大会～」で、天皇陛下もご臨席されまして、漁場・環境保全部門大会会長賞——これはこの部門の一番いい賞ですけれども、これを受賞することになりました。ちなみに、横路さんはこの2日前に議会が解散しておりますので、まぼろしの議長で名前がありますが、これは組合の事務所に張って、こういったことをやりましたよということで地元の方の自信にもなっている。

今までの流れを、さっきのコミュニティーデザインということもありますので、これに照らし合わせて考えてみたんですけれども、地域の課題というのがあります。これはウニが磯焼けで品質が悪くなって、所得が下がってしまう。そもそも水産業というのは地域の基盤産業だけれども、高齢化や担い手が不足してきて、非常に地域全体の不安感がある。さらに地元でやりたいけれども金もないとい

う事情というのが、この地域が、結構いろいろな場所で共通した課題だと思うんですけれども。

その次に社会教育的なアプローチで、「みんなで水産のことをちゃんときちっと見ようよ。これはまちのためになるんだよね」ということで、皆さんでこういった価値の共有をして、そういったものを通して子供たちが遊んだり、笑顔を見せると、例えば大人の方の共感を呼びますので、こういったことを続ける上で、次に人的なネットワークができてきて、「俺も協力してやるぜ」といったことで、この輪が広がる。それが最終的には地域の課題の解決につながってくるんじゃないかなと思います。

ポイントを整理してみました。

まずこういった事業をやる上で、やはり環境というのは非常に大切なので、環境と学びを大切にしたいもの、これは皆さんが非常に理解しやすい部分ですから、環境を大切にしようぜということをやっていく。

動機づけですけれども、今までの漁村で環境系のことをやるのに、「漁師さんがよくなるために」みたいなことを多分、第一に出して、「俺たちがもうかるために頑張るぞ」というのがわかりやすい仕組みだったと思うんですけれども、それだと当然、誰も手伝わない。「人の懐を肥やすために俺が頑張っとうるんだ」という話になりますので、地域の宝である美しい海をみんなで守っていこうよというところを銘打つ。それにかかわる価値観や情報を共有しよう。

そして、ボランティアの人に頑張ってもらう。ただ、ボランティアが一番お金がかからないんですけれども、手間が10倍ぐらいかかりますので、皆さん、大切にしましょうと。

あとは、それを推進するようなキーマンがいる。

課題としては、潜れなければ、これは多分なかなかうまくいかないの、みんなで潜りましょうとか。資金の不足というのもありますから、いろんな形で資金の調達をしていく。

お配りしていますこの「チビスロウ」ですが、これは1冊300円で北海道内の書店、コンビニ、キオスクなどで売ってみました。1部300円なんですね。300円で買くと、150円がこの活動資金に回るという仕組みでつくってみました。もう一つ狙いがありまして、地域の活動というのは、こういうフォーラムをやったり、地元で講演会をやったりしても、関心がある人しかそもそも来ないので、その人たちの理解は高まるんですけれども、水平的に広がるかという、なかなかそうでもないの、これが書店に並ぶことで広くいろんな人に知っていただく機会をつくりたい。さらに、お金を払ってまで買ってくれるという内容にあえてしています。観光ガイドブックとしても非常に役に立つようにつくったんですけれども、観光的に来ても、読んでいるうちに何となく環境のこともよくわかるというところを目指してつくってみました。本をつくるという過程で、地元の方にいろいろとプロジェクトを説明しますので、その人たちがよく理解してくれて、協力的な立場になっていただくというような効果もあったかと思っています。

あとは、最近、6次産業化ということも言われていますけれども、いろんな手法でマーケティングのようなことをやっていく必要もあるということです。

ただ、最後に、規制をして、冒頭に申し上げましたけれども、潜ってとるとするのは漁業法にひっかかったり、知らないで勝手にやると捕まります。そのほかにもいろんな問題があるということで、例えば旅客運送法にひっかかるとか、そういった問題もありますから、そういったことには十分注意していったらいいかなと思います。

ということで、海の環境保全でみんながハッピーになったというお話をさせていただきました。ありがとうございました。(拍手)

司会 大塚様、ありがとうございました。

ご質問などある方はいらっしゃいますでしょうか。

それでは、ご質問のある方はまたこの後の交流会でも直接お尋ねいただければと思います。

それでは、次の全体討議に移る前にここで10分ほど休憩を挟みたいと思います。4時5分から全体討議を行いますので、それまでに会場にお戻りください。また、アンケートがございますので、この時間を利用してご記入いただければと思います。